

混沌とした中から

日本式セキュリティポリシーについて（1）

個人情報保護法の施行、ウィルスの大流行、情報漏洩、情報流出のニュースなどセキュリティについての関心、注目がこれほど集まってきていることはありません。その中で、品質管理のISO9000、環境管理のISO14000などの認証取得の大きな波が過ぎ、今はBS7799やISMSなどのセキュリティの認証取得に関心が集まってきています。このような中で各企業はセキュリティポリシーの作成を進めてきていますが、果たしてこれが日本の企業風土にフィットしているのでしょうか。周りの企業で導入されている、国際規格に合わせなければ認められないなどの理由から導入を進めているのが実態ではないでしょうか。このことは前回まで特集していた「個人情報保護法」にも見る事が出来ます。ISO9000やBS7799などはアメリカを中心とした（といっても国際規格ですが）ものやイギリスの規格であったりします。日本の規格でも結果的には国際規格を焼きなおし（ほとんど内容は同じ）したものですから、当たり前という事は言えます。しかし、それが本当に日本の企業風土に合っているものかということについては考えられてきていません。外資系企業の多くではトップダウンの全社的なリスクマネジメントの考え方が発達しています。CEO（経営最高責任者、この言葉もだいぶ一般化してきていますが）から全社的にポリシーを作成してこれを守るように命令が下り、これによって従業員それぞれが「自分たちが全社のポリシーに対してなにをすべきか」を考えることが必要であり、雇用条件として自主的にポリシーを作成して守ることが必要条件として盛り込まれていることすらあります。このような状況下では自己の責任範囲と所在、守るべきルールが存在が必然化するため、従業員が会社の体制を疑う余地はほとんどありません。「社内ネットワーク」や「情報資産の抱えるリスク」、「何かあったときの自身の責任」などについて正確に提示され、その結果正確な意志が植えつけられることとなります。また、「完全能力主義」や「担当業務のリスクレベルと報酬の相互関係」が完成しているため、自らの仕事にはプロ意識があり、プロジェクトが失敗すればその責任は自らが負うことが当たり前とした企業風土からも、自己責任ということについて必然性を持っています。つまり、自分は企業の中でどのようなポジションであり、周りの環境が企業にとってどのように重要なものに囲まれているかについて常に意識し、その対価として報酬を得ているという意識が高いということになります。これは、欧米が契約社会であるということからきています。もっといえば、キリスト教が神との契約ということが基本になっていることが元になっていることが出来ます。なんだか企業の話のなかに宗教が出てくるのは場違いなような気がするかもしれませんが、欧米において実際問題生活の基本となっているのは宗教であるということが出来ますから、その部分を理解しなければ欧米社会を理解できないということが出来ます。キリスト教において（ユダヤ教もイスラム教も根っこは同じなので同様に考えることが出来ます）信仰するということは神との間で契約を取り交わすということです。きちんと戒律を守る代わりに、助けてもらおうとするのが考え方の基本です。ちなみに「新約聖書」というのは当たらずして契約という意味です。あまり、宗教的な部分に踏み込むつもりはないのですが、例えば、日本の契約書では、契約書に記載がない部分はその都度協議するというものがありますが、これは欧米では契約書ではないのです。契約というのは、まさに契約どおりにその条項を守るというものが欧米での契約書の考え方です。そのため細かいところまで条項が決められています。（次回へ続く）

(今週の情報誌から)

○日経エレクトロニクス 5月23日号

特集 インビジブル・エレクトロニクス

→2011年に地上アナログ放送が停波となり、家庭のテレビ受像機はすべてHDTV対応になり、ハードディスク録画機や光ディスク装置、パソコンなどが家庭内ネットワークにつながりHDTV対応となる。HDTV対応はエレクトロニクス技術の一つの到達点だが、次の目標として期待がかかるのが「インビジブルエレクトロニクス（見えない機器）」。
ユビキタスネットワークが生活に溶け込むようになるとそれに接続された機器が普及する。知らないところで情報を集め、情報を提供する。ドアを開けなくても冷蔵庫の中身がディスプレイに表示されたり、内容物でレシピを考えたり、次のエレクトロニクスはどこへ行くのか。

○日経バイト 6月号

特集 言葉を理解するコンピュータ

→人間が書いたり話したりする言葉をコンピュータが理解する。今はまだもちろん実用レベル（実用レベルがどの程度かは問題ですが）に達しているわけではないが、自然言語処理レベルはある一定に達し、大量の情報が氾濫し、なかなか個人で情報収集がままならない状況であることを考えると、今後の可能性が見えてくる。

○ASCII 6月号

特集 ドカーン！とTB超ストレージ

→家庭にネットワークを構築する人が増え、テレビの録画はHDD録画機、パソコンのHDDも100GBを越えているのが普通になっている。万が一のバックアップをどうするか。家庭でもバックアップは必要かの回答がネットワークドライブ。その容量も数百GBからTBになってきている。信用度を増すためにRAID5も可能となれば、どう環境を構築すればいいのか。

○N+I NETWORK Guide 7月号

特集 社員監視：実践マニュアル

→個人情報漏洩や企業内部関係者による不正、反抗が絶えない。以前「社内ブラックリストの作り方」の特集に続き「社員監視」の段階に入る。社員監視の必要理由は、ポイントは、何をどこまで監視するのか。性悪説による管理どころではない、社員は合理的に監視しなければならない。

○NETWORK WORLD 7月号

特集 ウィンドウズネットワークのトラブルシューティング

→Windowsのネットワークトラブルとしてどのようなものがあるか。ユーザにネットワークの設定を委託すると勝手な設定、変更でいろいろなトラブルが発生する。正しく設定、設定間違いの症状から対処方法を考える。